



たなか・ゆうこ 1952年神奈川県生まれ。江戸文化研究者。法政大学社会学部長を経て2014年から同大学総長。『江戸百夢』など著書多数。毎日新聞でコラム「田中優子の江戸から見ると」を連載。

「自由に生き抜く力」を 田中優子法政大学総長

近著のエッセー集『江戸から見ると』（青土社）で、沖縄の問題を何度かとりあげました。沖縄の現実が、日本の政治が抱えているアメリカ追随政治の実態を非常にわかりやすくあらわしているからです。

施政権が返還されて半世紀、日本の米軍基地の70%が沖縄に集中したまま、辺野古の新基地が県民の反対を押し切って建設されています。沖縄県民は日本復帰（1972年）の時、憲法9条に身を寄せたのです。法政大学卒業生である故・翁長雄志県知事が、「米軍基地がなければ沖縄経済はやっていけないというのは誤解だ。米軍基地がなくてもやっていける」と繰り返し講演していた姿を思い出します。

知的成果を失う

昨年10月、日本学術会議会員の任命拒否が起きた際、私はいち早く、憲法が保障する学問の自由に違反する行為であり、国民の利益をそこなう、という総長メッセージを出しました。

自民党の政策に反対意見をもつ会員を排除することは、外部からの干渉・介入、恫喝（どうかつ）にほかなりません。このままでは、研究者、教育者が自分の考え方を現在の政治の方向にあわせる傾向を生むと懸念します。研究者の多様な個性や研究の立場を危うくし、国民の知的成果を失わせることになるのではないのでしょうか。

学術会議は日本の学術団体の代表としてこれまでに、プラスチックの海洋投棄、人間社会と野生動物の共存など環境問題で議論を起こし、一人ひとりの研究の成果を生かし、国際的に大切な提言をしてきました。こうした仕事、事実を無視して、政府は「会員は公務員だ」などと従来の解釈を変えたすりかえの議論をしています。

学ぶ方法の変化

江戸時代末期に寺子屋や藩校・私塾で学んだ武士の子弟や庶民の若者たちは、支配階級が入れ替わるという大変動の中で、新しい国家づくりにむけて動き出しました。草の根からの自由民権運動もおきました。全国に約2000もの結社が生まれたといわれ、国会開設、新憲法づくりにむけてエネルギーが渦巻く。そんな中で、法政大学の前身「東京法学社」も創設（1880年）されています。

いま、コロナ禍のなかで大学の授業は対面のみの授業から、オンライン、オンデマンドも組み合わせた授業に変わっています。この新しい「時間と空間」の出現を、一斉教育から個々の学生が学ぶ方法へ変化させる機会と捉えることが可能です。議論を大切にした江戸時代の学びの方法をもう一度、デジタル環境で再現できるのではないかと考えています。

また、江戸時代に小さな単位で無数に生まれた文化拠点「連」は「自由に生き抜く」力を培いました。これから必要なことは「自由」は与えられるものではなく、自らの努力で実現するものだ、という考え方です。社会を生き抜く実践を通じて考える、そんな「現場の知」こそが求められています。

聞き手・澤田勝雄 写真・中野茂樹

たなか・ゆうこ 1952年神奈川県生まれ。江戸文化研究者。法政大学社会学部長を経て2014年から同大学総長。『江戸百夢』など著書多数。毎日新聞でコラム「田中優子の江戸から見ると」を連載。

しんぶん赤旗 電子版 発言2021 法政大学総長 田中優子さん 2021年1月24日【1面】